

高校生の進路意識に関する実践的研究 ～ロール・レタリングの手法を用いて～

佐藤 一郎（長崎大学大学院教育学研究科教職実践専攻）

原田 純治（長崎大学大学院教育学研究科）

内野 成美（長崎大学大学院教育学研究科）

本稿は、高校生の進路意識を高める取り組みについて実践的研究を行ったものである。筆者の高等学校における進路指導担当者としての経験から、就職後短期間のうちに離職する者が多いことが指摘できる。そこで、高校2年生を対象に進路意識を高めることを目的として、10年後の自分を相手にしたロール・レタリングをほぼ1ヶ月間3往復行わせた。統制群に比べロール・レタリング実施群では、進路意識尺度が全般的に高まるなどの結果が得られ、一定の成果を見出すことができた。

Keyword：高校生、キャリア教育、進路意識、ロール・レタリング、エゴグラム

問題と目的

はじめに

高等学校への進学率が、「98.4%（文部科学省、平成25年度学校基本調査）」を超え、若者のほとんどが進学する現代では、高等学校への進学目的は、上級学校への進学や各企業へ就職など、人生を歩き出す準備と決断とを求められている。特に就職を希望する生徒にとっては、就職難が問題視されている昨今、生涯続けられる仕事へ就くことは、何よりも嬉しいことであり、そのため自分の適性ややりがいを満たす仕事を探している。ところが、そうやって就いた職業も1年とたたないうちに離職する者も20.8%と多い（平成25年度版子ども・若者白書）。

そこで、本研究では、高校生の進路意識を高めるためには、「自己理解」が必要であると考え、大学生や中学生での取り組みで、注目されているロール・レタリングを行うこととした。

研究の動機

今回の研究のきっかけは、筆者の教員生活で出会った事例である。その中から、強く印象に残っているものを取り上げてみた。

一人目は、大学へ進学した生徒である。この生徒は、将来の目標が不安定であった。受験勉強の取りかかりは遅かったが、地元国立大学へ進学した。入学した学部が考えていたものとは違って戸惑いや不満を持っていた。さらに就職活動では、自分の適性に迷いを感じて身が入らず、大学院へ進み研究を続けながら

将来の仕事について模索していた。現在は安定した仕事に就いているが、自己理解を深める手法を知っていれば、職業選択の際に役に立ったのではないかと考えられる。

二人目は、大学へ進学したが、1 ヶ月で退学した生徒である。この生徒は、観光業界（特に旅行代理店）への就職を希望していたが、高校への求人がないため四年制大学へ進学した。しかし、大学の内容が期待したものとは違うことから、退学し専門学校へ再入学した。その後、専門学校を無事卒業し、大手の旅行代理店への就職を決めることができた。

この生徒は、コミュニケーション能力もあり将来の目標も持っていた。自分の目標があるにも関わらず、進学先の選び方に問題があったと解釈できるが、それと同時に生徒自身が、進学先の情報収集をしっかりと行い、そこで学んでいる自分の姿を想像してみることも大切ではなかったのかと考えられる。

三人目は、就職を希望していたが、会社選びに自信が持てなかった生徒である。この生徒は、興味のある仕事はあるのだが、「自分にできるか自信がない」「親元から離れることへの不安」を正直に話してくれた。素直で人なつっこい性格なのだが、日頃の努力が成績に表れないため、自分に自信が持てないでいた。それが、社会へ出ることへの不安に繋がっていた。学校活動の中で自尊感情を高める取り組みが必要であった。

高等学校の現場における事例の内容に個人的な差異はあるものの、ほとんどの事例に共通しているのは、「自己理解の不十分さ」と「自尊感情の欠如」ということがあげられる。

高等学校の進路指導

次に、高等学校の進路指導について振り返ってみる。高等学校には、全日制、定時制、通信制の3つの課程があり、さらに普通科・工業科・商業科・農業科などの特徴ある専門学科が設置されている。生徒の進路希望状況は、その課程や学科によっても異なるが、どの学校でも進学希望者と就職希望者が在籍していると考えてよい。

進路指導の主な取り組みは、1) 生徒の進路希望の実態把握、2) 進路意識を持たせ、進路意欲の向上を図る、3) 学習意欲の向上を図る、4) 自己の適性を見極めさせる等が挙げられる。

進路指導は、学習活動や部活動・学校行事などと並行して行われるので、1年から2年、3年へとギアチェンジしていくように、深みを増していくのが望ましい。この取り組みを、系統立てて単なる「進路活動」だけではなく、「職業観・勤労観」を養う目的で始められたのが、「キャリア教育」という概念である。そこで、実践に入る前に、「進路指導」と「キャリア教育」の関連を確認しておく必要がある。

進路指導とキャリア教育

進路指導は、「生徒の個人資料、進路情報、啓発的経験および相談を通じて、

生徒みずから、将来の進路の選択、計画をし、就職または進学して、さらにその後の生活によりよく適応し、進歩する能力を伸長するように、教師が教育の一環として、組織的、継続的に援助する過程である。（文部省『進路指導の手引き－中学校学級担任編 日本職業指導協会 昭和 36 年』）と定義されている。

その後、昭和 58 年に刊行された「文部省『進路指導の手引き－高等学校ホームルーム担任編』日本職業指導協会」では、「進路指導は、生徒の一人ひとりが、自分の将来への生き方への関心を深め、自分の能力・適性等の発見と開発に努め、進路の世界への知見を広くかつ深いものとし、やがて自分の将来への展望を持ち、進路の選択・計画をし、卒業後の生活によりよく適応し、社会的・職業的自己実現を達成していくことに必要な、生徒の自己指導能力の伸長を目指す、教師の計画的、組織的、継続的な指導・援助の過程（である。）」と定義されている。

平成 24 年版の「高等学校 キャリア教育の手引き」によると、進路指導とキャリア教育との関係は、図 1 に示されている通りで、キャリア教育の中でも将来を決定付ける時期（中学校・高等学校）での取り組みを、進路指導として取り上げていると読み取ることができる。

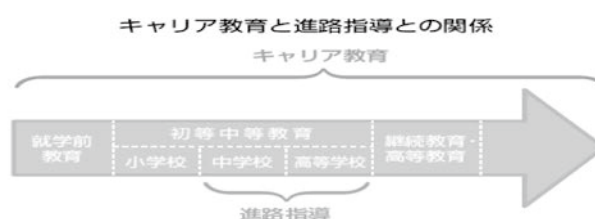


図1 キャリア教育と進路指導との関係

平成 20 年 12 月、文部科学大臣が中央教育審議会に対して「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育のあり方について」諮問し、平成 23 年 1 月に答申がまとめられた。

その意義については次の 3 点に整理されている。

○第一に、キャリア教育は、一人一人のキャリアの発達や個人としての自立を促す視点から、学校教育を構成していくための理念と方向性を示すものである。（後略）

○第二に、キャリア教育は、将来、社会人・職業人として自立していくために発達させるべき能力や態度があるという前提に立って、各学校段階で取り組むべき発達課題を明らかにし、日々の教育活動を通して達成させることを目指すものである。（後略）

○第三に、キャリア教育を実践し、学校生活と社会生活や職業生活を結び、関連づけ、将来の夢と学業を結びつけることにより、生徒・学生等の学習意欲を喚起することの大切さが確認できる。（後略）

キャリア教育が提唱された背景には、子どもたちが自分の将来を考えるに役立つ理想とする大人のモデルが見つけにくく、自らの将来に向けて希望あふれる夢を描くことが容易でなくなっていることがあげられる。さらにその課題は、「学校から社会への移行をめぐる課題」「子どもたちの生活・意識の変容」の 2 点があげられている。

「学校から社会への移行をめぐる課題」では、新卒者への求人状況が変化したことや雇用システムの変化などの社会情勢も取り上げられているが、若者に対する問題点としては、勤労観や職業観の未熟さ、基礎的資質・能力の発達の遅れ、経験不足や意識の未発達状態傾向などが指摘されている。「子どもたちの生活・意識の変容」では、身体的には早熟傾向にあるものの、精神的・社会的自立が遅れることや、高学歴社会に伴い職業選択・決定を先送りする傾向にあること、自立的な将来設計が希薄なまま、進学や就職する者の増加などが指摘されている。具体的には、人間関係をうまく築くことができない、自分で意思決定ができない、自己肯定感を持ってない、将来に希望を持つことができないといったことが指摘されている。この観点から、学校教育には、社会人として自立した人を育てることが求められ、キャリア教育の推進へとつながっていった。

国立教育政策研究所は、中央教育審議会答申を受けて、「人間関係形成能力」「情報活用能力」「将来設計能力」「意思決定能力」の4つの能力を柱とした「職業観・勤労観を育む学習プログラムの枠組み（例）」を発表した（平成14年）。

方 法

尺度の選定と実施

今回の実践実習は、県立X高等学校（普通科 全校生徒157名）に依頼した。生徒と共に活動しながら、生徒たちの特徴として、教員へ依存する心が強く、積極的な活動や自分で決めた行動を取ることが苦手な生徒が多いのではないかと判断した。

そこで、進路意識の調査をするにあたって、次の2点に配慮しながら尺度の選定について検討した。

①質問紙の内容は、簡潔な表現で、生徒が理解しやすい表現であること

わかりにくい表現があると担任への質問が増えることが予想される。そうすると各クラスでの説明や生徒の解釈にズレが生じる恐れがあり、適切な回答が得られないことも考えられる。

②質問の個数が適量であること

意識調査だけで、LHR等の時間（45分）を使うことは現実的ではなく、現場においても定期的に行うための時間設定が困難になる。そこで、生徒の意識の変容を知るためには短時間で実施できるものが良いと判断した。実際の使用も考えると、SHRの10分程度で実施可能なものであることが望ましいと考える。

このことを踏まえた上で参考にしたのが、「高校生のための進路選択自己効力尺度の作成（富永, 2006）」である。これは、進路活動上必要な「自己理解」「情報収集」「計画性」「目標選択」「課題解決能力」の5項目が盛り込まれており、今回の研究内容に即していると判断した。

進路意識調査の実施については、まず全校の実態把握と、ターゲットクラスの

選定のため、各学年会に参加し調査の趣旨説明と実施上の注意を説明した。各担任の協力を得て、進路意識調査は、滞りなく実施された。

結果と考察

進路意識調査の結果と目標

進路意識調査への回答に関し、因子分析（主因子法、プロマックス回転）を行った。固有値の減衰状況と解釈可能性について検討した結果、5 因子解を採用した。因子負荷量の絶対値が.400 以上の項目であること、複数の因子に負荷量の高い項目でないことを基準に、因子の解釈を行った。その結果を表 1 に示す。

表 1 進路意識に関するアンケート調査因子分析

進路意識に関するアンケート調査因子分析(主因子法、プロマックス回転)					
変数 (質問項目)	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5
第1 因子：情報収集と計画					
・先生や家族と自分の進路について話し合っている	0.741	-0.282	-0.157	0.395	0.072
・入試や就職の情報は、インターネットなどで集めている	0.740	-0.048	0.013	-0.021	-0.130
・大学や専門学校、就職の情報を、自分で集めている	0.684	0.091	0.118	0.007	-0.113
・将来の仕事に役立つ免許や資格をとるための計画を立てている	0.601	0.027	0.150	-0.145	0.021
・将来の目標を持ち、それを実現するための計画を立てている	0.486	0.329	0.156	-0.128	0.087
・進路指導室などで進路に関する資料を探している	0.417	0.124	-0.294	-0.110	-0.073
第2 因子：進路意欲					
・本当に好きな進路に進むためには、どの地域でもかまわない	0.029	0.712	-0.169	-0.089	-0.035
・周囲の人から賛成してもらえなくても、希望する進路に進みたい	-0.174	0.707	-0.028	0.191	-0.013
・進学や就職に失敗しても、自分が望む進路であればもう一度挑戦する	0.132	0.612	-0.112	0.090	-0.061
・将来どのような生活がしたいかが、はっきりしている	0.317	0.421	0.033	-0.081	0.120
第3 因子：就きたい職業への興味関心					
・興味をもてる職業がない ●	-0.100	-0.190	0.864	-0.162	0.129
・機会があれば、自分が興味を持っている分野で働いている人に話を聞きたい	0.069	-0.081	0.641	-0.001	-0.127
・自分が就きたい職業の仕事の内容を理解している	0.009	0.013	0.563	0.076	-0.003
・やってみたい理想の職業がある	-0.197	0.337	0.508	0.113	-0.147
第4 因子：適性に見合った自立的職業選択					
・親や先生が勧める進路でも、自分の適性や能力に合っていなければ断れる	-0.089	0.131	-0.080	0.747	0.037
・自分の興味や能力に合った職業を選ぶことができる	-0.012	0.241	0.133	0.404	0.201
第5 因子：進路選択の迷いのなさ					
・自分の才能を生かせる職業分野がわからない ●	0.047	-0.029	0.045	-0.043	0.758
・進路は決めているが、それが正しいか間違っているか悩んでいる ●	-0.216	-0.050	-0.071	0.106	0.477
因子寄与	2.594	2.007	1.978	1.043	0.966
寄与率	28.21%	7.51%	3.70%	3.17%	2.98%

注) ●は逆転項目

第 1 因子には、「先生や家族と自分の進路について話し合っている」「大学や専門学校、就職の情報を自分で集めている」「将来の目標を持ち、それを実現するための計画を立てている」など、進路の方向について目標を持ち、計画立てている項目から構成されていたので、「情報収集と計画」因子と解釈した。第 2 因子は、「本当に好きな進路に進むためには、どの地域でもかまわない」「進学や就職に失敗しても、自分が望む進路であればもう一度挑戦する」など、強い意欲の表れを示す項目から構成されていたので、「進路意欲」因子と解釈した。第 3 因子は、「自分が就きたい職業の仕事の内容を理解している」「やってみたい理想の職業がある」など、将来の職業への興味関心を示す項目から構成されていたので、「就きたい職業への興味・関心」因子と解釈した。第 4 因子は、「親や先

生が勧める進路でも、自分の適性や能力に合ってなければ断れる」「自分の興味や能力に合った職業を選ぶことができる」から構成されていたので、「適正能力に見合った自立的職業選択」因子と解釈した。第5因子は、「自分の才能を生かせる職業分野がわからない」「進路は決めているが、それが正しいか間違っているか悩んでいる」から構成されていたので、「進路選択の迷いのなさ」因子と解釈した。

これらの因子をもとに、全校生徒に対して学年別のレーダーチャートを作成した（図2）。このレーダーチャートから、「進路に対する意欲や興味・関心はあるが、自分の適性に見合った進路選択に問題を抱えている」と解釈し、自分のことを見つめ返すことの出来る取り組みを検討した。さらに、2学年の結果から2年1組のグラフが各因子において2年2組よりも低い数値を示していることから、（図3）、2年1組で実践の行うこととした。

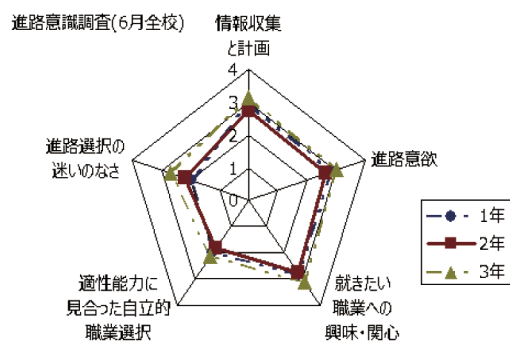


図2 進路意識調査（6月全校）

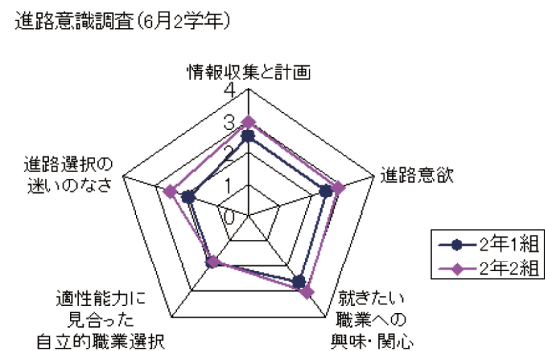


図3 進路意識調査（6月2学年）

実践内容については、高校生期に必要なキャリア発達課題（2012，文部科学省高等学校キャリア教育の手引き）である、①自己理解の深化と自己受容②選択基準としての勤労観、職業観の確立③将来設計の立案と社会的移行の準備④進路の現実の吟味と試行的参加、の中でも①自己理解の深化と自己受容の支援に関わるものと考え、その手法としてロール・レタリングを取り入れた。

ロール・レタリングとは、1984年に西九州大学名誉教授の春口徳雄氏が、ゲシュタルト療法（※1）の空いすの技法にヒントを得て、日本交流分析学会全国大

※1）ゲシュタルト療法とは、「いまーここ」中心のセラピーであると表現している。過去に何をしたら、それはなぜかを問うことはしない。「今、ここ」で、「いかに」話しているか、「なにを」話しているかを問題にする。そのアプローチとは、「気づき」を通して本来の自分を取り戻し、自己成長を促すことを目的とするものである。「気づき」とは、人が何らかの情報にアクセスできて、その情報を行動のコントロールに利用できる状態のこのことを言う。だから自分自身に問題があっても、それに気づいていなければ対処のしようもない。気づかない場合には選択のしようがなく、いつもと同じ自動的な反応が起きることとなる。（日本ゲシュタルト療法学会HP）

会において初めて提唱されたもので、「気づき」を発見させるために、自分自身が自己と他者の双方の役割を演じて、往復書簡することから役割交換書簡法とも言われる。

ロール・レタリングには、「①文章による感情の明確化、②自己カウンセリング作用、③カタルシス作用、④対決と受容、⑤自己と他者、他方からの視点の獲得、⑥イメージ脱感作、⑦非論理的・不合理的思考への気づき」の7つの作用があるとされている（春口, 1984）。

今回の実践では、2年1組に協力をお願いし、「10年後の自分と往復書簡することにより、進路目標を持ち、今の自分に足りないものを気づかせ、進路意欲を向上させること」を今回の実践の目標とした。

実践

2年1組は、生徒数20名（男子9名、女子11名）の少人数のクラスである。文化祭などの学校行事には、女子生徒の指揮の下、男子生徒も役割を分担して取り組んでいた。男子の中には、アスペルガー症候群と診断されている生徒も含まれている。この生徒は、時折トラブルはあるものの周囲の者の理解も得て、学校生活を送ることができている。このような点では、交友関係の安定したクラスである。その他、行事への取り組みが活動的であるの反面、日常生活では落ち着きがなく、担任教員の連絡も最後まで聞かずに質問をしたり、連絡の意味を取り違えたりするなどの問題点も見られた。また、基礎学力向上のための取り組みにも個人差があり、熱心に取り組む生徒もいれば、そうでない生徒もいた。

これらの観察結果に基づき、ロール・レタリングを実施するにあたり、次の点に配慮した。

- ①実施回数は3往復と決め事前に計画を連絡しておくことで、集中力を維持させていく。
- ②手紙の内容は、進路に関することだけとして始めるが、その内容によっては、2回目以降具体的な指示を出すことも考えておく。
- ③ロール・レタリングのみでは、生徒の変容がうかがえない場合もあるので、開始時と終了時にエゴグラムを実行し、その変化にも注目する。

生徒へは、「ロール・レタリング～私の未来はここから始まる～」と題した手紙を書く冊子を作った。ロール・レタリングに抵抗なく取り組んでもらうために、「ロール・レタリングのノートは、他の人には見せない」ということを告げた。また、配布と回収は、筆者が直接行い、一人一人手渡しをすることで、「他の人には見せない」という気持ちを表した。

表2 ロール・レタリングとエゴグラムの実施予定

	学校行事	実践取組
5～6月		生徒観察・授業参観
6月		進路意識調査1回目(全校生徒)
9月	文化祭準備・文化祭	クラス活動参加 エゴグラム1回目(2年1組)
10月	中間考査	
		ロール・レタリング1回目往信
	体育祭	
		ロール・レタリング1回目復信 ロール・レタリング2回目往信 ロール・レタリング2回目復信
11月	2年生インターンシップ	
		ロール・レタリング3回目往信
	進路面談(2年)	ロール・レタリング3回目復信 エゴグラム2回目(2年1組)
		進路意識調査2回目(全校生徒)

実践期間と学校行事・取り組みの内容を表 2 に示した。

生徒達は、1 回目の往信には興味も加わって楽しげに取り組んでいた。しかし、1 回目の復信になると 10 年後の自分を想定しながら返事を書くことが、困難な様子がうかがえた。そこで、次のようにタイトルを決めて取り組んでもらった。

2 回目の往信「10 年後の自分に進路相談をしてみよう」

2 回目の復信「進路相談に真剣に応えよう」

3 回目の往信「10 年後の自分に進路宣誓しよう

(宣誓できない人は、インターンシップの感想を伝えよう)」

3 回目の復信「10 年後の自分から今の自分へエールを送ろう」

実習期間が終了する週には、比較検討するため、再度全校生徒への進路意識調査を行った(図 4)。各学年とも 6 月よりもレーダーチャートのグラフは広がりを見せており、それぞれの意識が高まっていると読み取れる。さらに、2 年生のクラス別の分析によると(図 5)、6 月の時点では、1 組と 2 組の間に生じていた開きが、ほとんどなくなっている状況であった。

進路意識調査(11月全校)

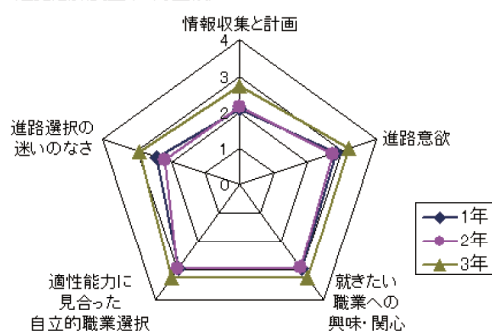


図 4 進路意識調査 (11 月全校)

進路意識調査(11月2学年)

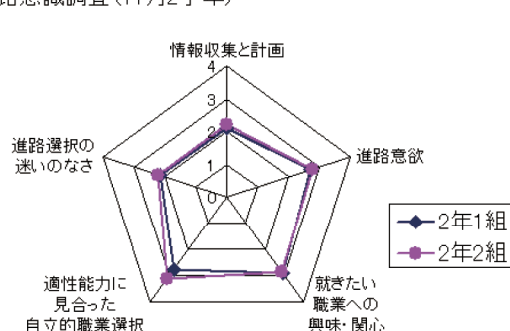


図 5 進路意識調査 (11 月 2 学年)

レーダーチャートのグラフだけ見ると、2 年生は 6 月よりも広がりを見せ、さらに 2 年 1 組の広がりが大きくなったことが見て取れる。6 月と比較すると有意な差は見られたものの、このクラスにだけ現れるものではなかった。これは、この期間、進学補習・模擬試験・保護者面談・クラス面談などが行われてきたことにより、学校全体の意識が向上していると考えられる。

そこで、2 年 1 組への取り組みの影響を見るために、エゴグラムの変化と進路意識調査のレーダーチャートとを比較し検討した。その結果、エゴグラムの中で A (アダルト・合理的な大人) の変化と因子 3「就きたい職業への興味・関心」との間に相関が見られた ($r=.33, p< .05$) (表 3)。

学校独自の進路指導を受けながら、生徒たちの

表 3 エゴグラムの A (アダルト) と各因子の相関係数

因子1: 情報収集と計画			因子2: 進路意欲		
相関行列			相関行列		
	A	因子1		A	因子2
A	1.00	0.21	A	1.00	0.21
因子1		1.00	因子2		1.00

因子3: 就きたい職業への興味・関心			因子4: 適性能力に見合った自立的職業選択		
相関行列			相関行列		
	A	因子3		A	因子4
A	1.00	0.33	A	1.00	0.19
因子3		1.00	因子4		1.00

因子5: 進路選択の迷いのなさ		
相関行列		
	A	因子5
A	1.00	-0.13
因子5		1.00

心には、冷静かつ客観的に将来の職業への関心が芽生えていると判断できる。さらに、因子 5「進路選択の迷いのなさ」とには、弱い相関ではあるが ($r=-.13$)、ここだけ負の相関が示された。進路目標はあるが、現在の自分の置かれた状況が客観的に見えてきたために、進路目標を見失ってきていると考えられる。さらに、それぞれの因子間での相関も調べてみた(表 4)。

表 4 因子間での相関係数

相関行列					
	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5
因子1	1.00	0.52	0.49	-0.08	0.67
因子2		1.00	0.69	-0.09	0.23
因子3			1.00	0.33	0.29
因子4				1.00	0.19
因子5					1.00

因子1: 情報収集と計画

因子2: 進路意欲

因子3: 就きたい職業への興味・関心

因子4: 適性能力に見合った自立的職業選択

因子5: 進路選択の迷いのなさ

ここでは、情報収集が進路意欲や興味・関心を高め、進路の迷いと相関も高いことが読み取れる。つまり、進路指導に関する取り組みが、生徒の意欲を高めることに繋がると言えるだろう。また、興味・関心が高まれば意欲が高まり、情報収集も行われていくと解釈できる。

現場における取り組み

ロール・レタリングを学校現場で実施するときの課題と対策を検討した。

① 生徒の関心が長続きしない

最初は、興味を持ち面白がっていた生徒も、回を追う毎に書くことが思いつかずに提出を渋るようになり、ついには回収が困難となった。実在する人物への手紙であれば、書きやすいのだろうが、今回のように手紙の相手が「10年後の私」となると、相当に想像力が必要となるので、生徒の実態を考慮しながら、テーマを指示することが必要であったと考えられる。また、文章表現の苦手な生徒に対しては、誤字・脱字の添削は行わないことを説明したり、箇条書きやイラストなどを添えても良いと助言することで、苦手意識を回避できただろう(実際に何人かはそのようにしていた)。ロール・レタリングの目的のひとつが、「書く」というところにあることを十分理解させることが大切である。

② 実施するテーマと違う内容も書かれていた あるいは 白紙であった

高校生には、大人への変化の移行期間であることから、今回取り上げた「進路」の悩みだけが生徒の悩み・迷いではない。それらは、互いに関係し合っていると考えた方が適切であろう。生徒の中には、今の自分の悩みを 10 年後の自分に打ち明けながら、その打開策を今の自分へ向けて発信する生徒もいた。ロール・レタリングの内容が指示されたテーマからそれているからといって、内容への指導をするのではなく、生徒のありのままの姿として受け止め、その変容を見守り適切な支援を行うことが肝要である。提出されたものが、白紙であったとしても、次回に書くような強制は、生徒が自分を見つめることとは異なる方向へ向かう恐れがあるので、好ましくない。可能であれば、「なぜ白紙なのか。ただ思いつかなかっただけなのか。書きたくない理由があるのか。」そういったことでもかまわないから、書いてみようと呼びかけることは、次へ進む

きっかけになると考える。

成果と今後の課題

最後に、今回の実践研究を通して、生徒の進路意識が明確に向上したと確認することは、困難であった。しかし、生徒一人一人のロール・レタリングの内容からは、今の自分を見つめなおし、将来へ向けて「こうありたい」と願う気持ちが芽生えてきたことを読み取ることができ、成長の兆しが見え始めたと解釈してもいいだろう。もっと長期的な取り組みを行い、検討する必要がある。さらに、ロール・レタリングと同時にエゴグラムを実施することで、生徒の心理状態をより具体的に把握することができた。つまりこれらの取り組みは、進路指導上の悩みだけでなく、高校生の悩み全体に対して、把握できる手法であることも体験できた。

これらのことから、ロール・レタリングは、進路意欲の向上だけでなく、生徒の学校生活を支える手法として、活用できると判断した。さらに、集団で実施することが可能なことから、クラス活動だけでなく、部活動などの集団で実施することで、集団の方向付けを行ったり意思統一を図ったりすることも可能なのではないかと考えられる。

今後は、ロール・レタリングを進路指導の中に長期的な取り組みとして位置づけ、高校生の迷いや悩みに寄り添いながら進路支援に役立てていき、離職率や中途退学の問題にどのように関わられるのか検討する必要がある。

引用文献

昭和 36 年文部省 進路指導の手引き－中学校学級担任編 日本職業指導協会
昭和 58 年文部省 進路指導の手引き－高等学校ホームルーム編
日本進路指導協会
平成 24 年文部科学省 高等学校キャリア教育の手引き 文部科学省

参考文献

富永美佐子 2006 高校生のための進路選択自己効力尺度の作成
－内容的妥当性・併存的妥当性の検討から－
岡本泰弘著、杉田峰康、春日徳雄監修 エゴグラム・ロールレタリング実践法
少年写真新聞社
日本ゲシュタルト療法学会
<http://www.ja-gestalt.org/html/gestalt/index.html>
芦原睦監修 自分がわかる心理テスト PART 2 講談社 BLUE BACKS
中嶋渥、山本眞利子 2007 「就職後の自分」を用いたロール・レタリング
が大学生の進路不決断と自尊感情に及ぼす影響